

弾道ミサイルニュース：

ウクライナで逮捕された北朝鮮スパイ事件から北朝鮮の核兵器開発を見る

漢和防務評論 20130523

(訳者コメント)

漢和防務評論ネット版 5 月号の記事を紹介します。

記事は、2011 年夏、ウクライナで北朝鮮スパイが旧ソ連の SS-18 型の技術資料を盗もうとして逮捕された経緯を紹介しています。

かつては中国もウクライナの ICBM 工場に接近しようとしていたとのことですが、現在は艦載機関連技術や大型軍用輸送機技術にアクセス対象が移っているようです。

ウクライナは最先端技術を有してはいないが、中国、北朝鮮にとって必要な技術を持っていて、うまく取引しているということでしょうか。

KDR キエフ Y.SIDOV 特電：

2012 年 7 月、ウクライナ国家安全局は北朝鮮スパイに対し禁固 8 年を宣告した。またスパイ活動の経過を映した録画も公開した。本誌は、これらの録画を分析した結果、北朝鮮が米国本土を攻撃できる大陸間弾道ミサイル(ICBM)を開発しようとしており、それを今まさに行動で示し、それが一部進展していると判断した。

録画を見ると、2011 年のある夏の日、駐白ロシア北朝鮮大使館の一人の外交官がドニエプロペトロフスク市にやってきて、ウクライナ国内に駐在する別の北朝鮮人 1 名と会った。二人は、毎日 YUZHNU 機械工場付近の”レーニン広場”をぶらぶら歩きし、新聞など見て時間つぶししている定年退職労働者を専門に流暢なロシア語で話しかけた。YUZHNU 機械工場は一般的な機械工場ではなく、ソ連時代には SS-18、SS-24 等の大型 ICBM の組立工場があった。

ウクライナ国家安全局は、最初からこの二人をマークした。この点から分析すると、ソ連解体後も元 CIS 各国の情報部門は情報協力及び対スパイ協力関係を確立している可能性が極めて高い。駐白ロシア北朝鮮外交官が入国したのちミンスク、或いはモスクワから通報を受けたと思われるが、当然これは本誌の推測である。

この二人の北朝鮮人は、ついに元ミサイル工場の労働者を探し当てた。衆知の通り、この工場は、すでに核ミサイルを生産してはいないが、ICBM の多くの

設計図や資料を保管していた。このことから当時は中国が積極的にこの工場にアクセスしようとしていた。ソ連解体後、本誌記者がウクライナ戦略ミサイル部隊の SS-24 発射サイロを見学した際に、退役将校は次のように述べた。相当多くの中国軍人がここを見学に来て録画や写真を撮った、と。

北朝鮮スパイは、定年退職労働者に対しミサイル生産に携わった設計技師を紹介してくれるよう求め、願い通りになった。北朝鮮スパイは、面会したのち 3000 ドルを見せ、SS-18 弾道ミサイルのロケット燃料の成分、及びエンジンの設計図を提供するよう求めた。最初の面会で双方は金額をめぐる争いになった。

このことから北朝鮮の情報工作資金が以前のように潤沢でないことが分かる。かつて金賢姫が欧州で行ったスパイ教育費用は 1 回あたり 1 万ドル以上であった。

最後にウクライナ設計技師は、設計図を提供すると返答し、直ちに連邦安全局に報告した。

連邦安全局の計略のもと、北朝鮮スパイは設計技師が指定した場所にやってきてデジタルカメラで“秘密資料”を大量に撮影し、その場で逮捕された。

北朝鮮スパイが SS-18 型 ICBM エンジン技術及び燃料に興味を示したことは十分注意する必要がある。特に関心を持つべきことは、1990 年代、ウクライナが動揺していた時期に、北朝鮮スパイは同様の方法で、すなわち“レーニン広場”で元戦略ミサイル設計技師を募集し平壤に招いて“運搬ロケット”の設計を手伝わせたのではないかと疑問である。そうでなければ、北朝鮮がこれほど短期間に長距離戦略ミサイルを開発できるはずがない。

SS-18 には多くの改良型があるが、すべて 2 段式液体ロケットである。少なくとも 6 種類のタイプがあり、射程は 10200 KM から 11200 KM と様々である。上述のスパイ事件は、北朝鮮が射程 10000 KM 以上の ICBM を開発しようとしていることを示している。軽視すべきではない。このほか、2011 年になっても SS-18 型の燃料技術を求めていることから、北朝鮮のいわゆる“ICBM”開発は未だ完成していないと判断される。

以上